の不実行について咎めを受けます。古事記には「汝を葦原中国に使わせる所以は、其の国の荒振る神等を言趣け和せとぞ。何ぞ八年に至るまで、復奏さぬ。」と書かれています。その後、天若日子は悪いことをたくらんでいたことがばれて殺されてしまいます。現代的に言えば退職ということなのでしょう。

この古事記に書かれていることはまさに現代の仕事のしかたと同じであることが分かります。遠い7世紀から「ほうれんそう」の大切さや「ほうれんそう」をしないときには、できないわけがあり、それを早期に察知しないと、組織として大きな過ちを犯すこととなることを示しています。またリーダーからの指示を実行できない理由として、派遣先の職場に古くから根付く慣習に思いをいたらせることにより、「ほうれんそう」ができなくなり、古くからある職場の風土に染まっていってしまう様が描かれていることが分かります。昨年の流行語となった「忖度」に通じる現象のようです。

このように古代に書かれた「古事記」の時代から、出世を望む人間社会でのしがらみが存在したことが分かり、古典に対して親近感を覚えてしまいます。（以上）

## エッセイ

# 武士道を考える

瀬谷　俊二郎

ここでいう武士道とは、「日本の近世以降の封建社会における武士階級の倫理・道徳規範の根本をなす思想」と定義しておく。

広義には日本における支配階級であった武士の常識的な考え方を指すが厳密な定義があるわけではない。

### ではなぜ今『武士道』なのか

武士道は封建社会の枠の中ではあるが、社会の支配階級であった武士がどのように生きるべきかを問うた修養の規範であり、物事すべてを功利的・自己中心的に推し進めようとする資本主義的思潮全盛の中でもう一度見直してみたいと思ったからである。

武士道の萌芽は、「武道」、「家訓」、「戦陣訓」等に求められるが、これらは主に武士としての生き方に関わるものであり、普遍的に語られる道徳体系としてのいわゆる「武士道」とは趣が異なる。

江戸時代になると儒教朱子学の道徳でこの価値観を説明しようとする山鹿素行の『孫子諺義（職分論）』等によって、新たに士道の概念が確立された。

その後、「武士道と云うは、死ぬ事と見つけたり」の一節で有名な『葉隠れ』が山本常朝によって著されたがこれは藩政批判なども あったせいか禁書となり広く読まれることはなかった。

幕末になると、山岡鉄舟が『武士道』を著し「神道にあらず儒道にあらず仏道にあらず、神儒仏三道融和の道念にして、中古以降専ら武門においてその著しきを見る。これを名付け武士道と言う」として、武士道という言葉がひろく使われるようになった。

明治維新後、市民平等布告により、社会制度的な家制度が解体され、武士は事実上滅び、替わって怒涛のごとく西洋の新しい価値観が導入され社会全体が急速に西洋化していった。

その変わりゆく姿を見て心ある人々が「日本人とは何か」を問い直し、改めて和魂としての武士道が見直されることになった。和魂洋才という言葉が使われるようになったのもこの頃と言われている。

１８９９年（明治三十三年）武士道を初めて体系的かつ総括的に述べた『武士道・日本の魂』が新渡戸稲造によって英文で書き上げられ同年アメリカで、翌年日本で出版された。

著者の新渡戸稲造（1862～1933）は札幌農学校2期生（1期生を教えたクラーク博士とは入れ違い）卒業後「太平洋の架け橋」になりたいとアメリカのジョンズ・ホプキンズ大学に留学し、その後札幌農学校助教授としてドイツのハレ大学にも留学し、ここで農業経済学の博士号を取得した人物である。

アメリカでメアリー・エルキントンと結婚後１８９１年に帰国、札幌農学校教授に赴任したが夫婦そろって体調を崩したためカリフォルニア州で転地療養をすることにして、ここで『武士道・日本の魂』を英文で書き上げたのである。

日清戦争の勝利などで日本及び日本人に対する関心が高まっていた時期であり、この本はイギリス、フランス、ドイツ、中国、ポーランド、ノルウエー、ロシア他でも出版され世界的なベストセラーとなって新渡戸稲造の名を世界的に知らしめることになった。

日本語訳の出版は日露戦争後の1908年であるが、この序において、新渡戸はこの本をアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトが読んで大変感動し、家族や友人等に多数配布されたことを光栄なことと記している。

すっかり日本贔屓となった同大統領が、出版六年後「あの崇高な精神をもった国ならば」ということで、日露講和条約の調停に尽力したことは知る人ぞ知る歴史的な出来事である。

以下、新渡戸稲造の『武士道・日本の魂』について極度に短縮して述べることにする。

## 道徳体系としての武士道

一言にすれば「武士の掟」、すなわち武人階級の身分に伴う義務（noblesse oblige）である。

### 武士道の淵源

仏教は、運命を穏やかに受け入れ生に執着せず、死と親しむこと。神道は、主に対する忠誠、祖先への尊敬、親への孝心。儒教は、君臣、親子、夫婦、長幼、朋友についての五倫を武士の心に植え付け日本の風土の中で熟成していった。

### 義

武士の掟の中で最も厳格な徳目である。武士にとって卑劣なる行動、不正な振る舞いほど忌まわしいものはない。

### 勇

勇気は、義のために行われるものでなければ、徳の中に数えられる価値はない。

### 仁

愛、寛容、他者への情愛、憐みの心、すなわち「仁」は、常に至高の徳として人間の魂が持つあらゆる性質の中で、最も気高きものとして認められる。

### 礼

礼は尊ぶべきものであるが、これを分析してみるとさらなる高位の徳と関係していることがわかる。

### 誠

嘘をついたり、ごまかしたりすることは卑怯とみなされ武士の約束は証文なしに決め実行された。

### 名誉

「名」「面目」「外聞」といった言葉で表現されるが、名誉が得られるならば命など安いものだと思われた。

### 忠誠

主の奴隷になることでは無く、主に正しい道をとらせるために己の命と誠実さをもってその叡智と良心に訴えることである。

### 武士の教育

第一に重んじたのは品格の形成であった。知性よりも品格、頭脳よりも魂を教える仕事が神聖な性質を帯び、教師の受けた尊敬は極めて高かった。

### 克己

不平不満を言わない忍耐と不屈の精神を養う一方、他者の楽しみや平穏を損なわないよう自分の苦しみ、悲しみを外に表さないという礼を重んじた。

### 切腹と敵討ち

切腹は法制度としての一つの儀式で、武士は自らの罪を償い、過ちを詫び、不名誉を免れ、朋友を救い、己の誠を証明する方法であった。また敵討は目上の人や恩義ある人のために行われるが、殺したものの悪事を許さないことは天の意志、故人の意志でありもっとも身近な代理人がこれを裁かなければならない。

### 刀・武士の魂

武士道は刀をその力と勇気の象徴とした。したがってその使用の時と所をわきまえることを重要視し、刀を所持することに誇りと責任感を与えた。「最善の勝利は血を流さずに得た勝利である」とし究極の理想は平和であることを示している。

### 女性の教育と地位

女性も武士道（元来男性のために設けられた教え）に基づいて教育され、感情抑制、精神の鍛

錬、護身のための武器（薙刀等）使用等訓練された。

**武士道の影響**

武士は社会的に民衆より高いところに存在し、自ら道徳律の模範を示して民衆を導いた。武士道はやがて国民全体の憧れとなり、その精神となったのである。

**武士道は今も**

荒波のように押し寄せた西洋文明で日本は大きく変貌しているがこのような壮大な事業をなす動機となった最大のものは武士道であり、これこそが維新の原動力だったのである。反面、武士道においては、深遠な哲学的思考の訓練がおろそかであり、かつ名誉心の行き過ぎが激しやすい性質や自負尊大を齎している。とはいえ、キリスト教は武士道という幹に接ぎ木する芽としては貧弱すぎる。

**武士道の未来**

武士道は知性と文化を独占的に支えた武士という特権階級の精神であったが、現代の社会的潮流は武士という特権階級そのものを容認しなくなっている。しかし武士道の精神はあまねく国民全体の道徳にまで溶け込んでおり、その象徴する桜の花のように、四方の風に吹き散らされた後でも、その香りで人類を祝福し、人類を豊かにしてくれるであろう。

新渡戸稲造が〝武士道・日本の魂〟を書いた時は三十七歳。

文中に出てくる数多くの古今東西の人名・事例から推して如何に彼が博識多学であったかを考えると恐ろしいほどの感銘を受ける。

又、武士道の精神もじっくり玩味したい内容で、久しぶりに充実した世界で遊ぶことが出来た次第である。（以上）

## 発表者紹介

（平成二十九年九月～十二月）

**＊九月三日（日）例会。**会員発表者3名、参加者105名

**▼発表者瀬谷俊二郎氏。題「江戸後期の3先生」。**冒頭、江戸時代の世界的出来事と日本の出来事を対比し当時の社会情勢を解説する。その上で江戸時代後期の代表的教育者である広瀬淡窓、緒方洪庵、吉田松陰の3先生の個別プロフィールや共通点を明らかにされた。結論として瀬谷氏は江戸後期の教育が非常に優れていたことが近代日本の歴史を動かす原動力となったと熱く語られた。

発表されている瀬谷俊二郎氏

**▼発表者古谷多聞氏。題「聯合艦隊の勝因・露艦隊の敗因・・天祐神助」。**日本海海戦における連合艦隊の勝因の定説は「天祐神助」とされている。古谷氏も天祐神助と考えるが、その意味するものは、敵国ロシアツアーリズムの腐敗・失政・無為無策という露艦隊の敗因であると指摘した。海軍オタクと自称する古谷氏は詳細な資料を基に、豊富な知識を駆使して自説を展開された。

**▼発表者渡会裕一氏。題「伊勢神宮における度会氏について」。**伊勢神宮・外宮の禰宜職を代々務めているのが度会氏であり、ご自身のルーツではと考えている。そこで渡会氏の父方先祖の出身地山形県と伊勢の繋がりについて検証された。まず伊勢神宮と度会氏の関係や伊勢参り、お蔭参り・御師について興味深く解説する。そして山形県の渡会姓の由来を詳しく論じ、ルーツであることを立証された。

**＊十一月四日（土）例会。**発表者3名。参加者89名。

**▼発表者進藤洋輔氏。題「ヒトラー**